

Of Human Bondage 試論

— V —

脇 田 勇

Ⅲ. Philip Carey の人生遍歴

- (1) キングズ・スクールの生活
- (2) Heidelberg 時代
- (3) Blackstable における Miss Wilkinson との出会い
- (4) ロンドンの経理会計士見習
- (5) パリの青春
- (6) ロンドンの St. Luke's Hospital 時代
— Mildred Rogers からの解放 —
- (7) 人生開眼 (本稿)

(7) 人 生 開 眼

「*Of Human Bondage* 試論」の結びとして、もう一度この長編の筋を辿ってみよう。9才にして孤児となった主人公 Philip Carey はフランスから英国に渡り、Kent 州の Blackstable で牧師をしている叔父 William Carey 夫妻の庇護をうけることになる。叔父は心の冷やかな吝嗇そのものの人間、それに反し叔母は控え目ながら、Philip に愛情を抱いている。Philip は生来 club-foot (蝦足) という肉体的障害があり、学校においても、教師や級友の嘲弄の的になっている。神への真剣な祈りにも拘らず、彼の足は癒されず、神への不信が生じる暗い9年間の体験が続く。18才の時、Heidelberg に行き、はじめて青春の自由を謳歌し、Hayward などの友を得、その宗教論を聞くうちに、信仰からの脱出を実現する。1年後 Blackstable に戻り、叔母の友人の Miss Wilkinson とはじめて恋愛遊戯におちいり、肉体関係を結ぶが、母親への思慕

のあらわれのような女性関係でしかない。間もなくロンドンの経理事務所に事務員として働くことになるが、これにも専心できず、絵の勉強のためパリ行を決心する。パリで Foinet の画塾に入り、諸々の芸術家と知り合う。特に Cronshaw という詩人との出会いにより、人生観の転機が到来する。Fanny Price という24才の画学生である女性は、彼の女性遍歴の2番目の相手である。彼女は、努力はするのだが全く才能に欠け、自分の将来への希望を喪失、失意と貧困のうちに自殺をとげる。Philip は芸術家としての才能に疑問をいだき、先生の Foinet に自分の絵につき忌憚のない意見を求めるが、職業を変えた方がいいと言われてしまう。その頃、彼に母親的愛情を与えてくれた叔母の死があり、それを機会にロンドンに出て、St. Luke's Hospital の付属医学校に入学、医学生として出発することになる。ここで、彼は第3番目の女性 Mildred Rogers を知ることになる。彼女は魅力のかけらもない女であるが、彼は恋慕の気持を持ち、なけなしの金で贈物などし、挙句の果てに結婚を申し込む。しかし Mildred はにべもなく断り、他の男と結婚すると言って姿を消してしまう。しばらくして三文小説を書いて自活している Norah Nesbit という第4番目の女性が好きになり、母性的やさしさにひかれ、Mildred を忘れてしまう。しかし Mildred があらわれ、男に捨てられしかも妊娠していると告白されると、彼女を入院させ、全ての費用を出してやるが、その金で、彼女は Griffiths という Philip の友だちと旅に出たりする。苦悩する Philip の前に救世主の如くあらわれるのが Thorpe Athelny 一家である。Athelny は Philip の病院の患者であるが、その家族と親交を持つことになり、愛情に飢えている Philip は日曜ごとにその家族を訪問するようになる。Athelny の家庭の愛に感動をおぼえはじめた頃、ロンドンの街かどで、厚化粧をして歩いている Mildred を発見する。春をひさぐ Mildred を見て、今や愛情のかけらも感じない Philip であるが、彼女を下宿に引きとり、子供と二人を養う羽目になる。半年ばかり後、その関係にも破局が訪れて、Mildred は悪罵の限りをつくして、再び姿を消してしまう。Philip は貧しさを補うために手を出した投機に失敗し、学業も続けられず、やっと Athelny の斡旋で麻布問屋の案内係の職に就く。ある日、昔

の友だちから、Hayward がアフリカで戦病死したと聞かされる。この Hayward の突然の死に、心を震憾させられ、人生の虚しさをいやというほど知らされる。色々考えているうちに、パリ時代の友人 Cronshaw の語ったペルシャ絨毯の謎を思いおこす。織匠は何の目的もなく精緻な模様を織りつづける。人間はそのように、それぞれの人生模様を織っていけばいいわけである。自分なりの横糸と縦糸により、好きな模様を作りあげればよい。人生無意味の境地が開かれるとともに、今までのあらゆる懊悩や迷いが、鱗のはがれる始く取払われて、歓喜の湧きあがるのを感じる。ある日、Mildred からの手紙を受けとり会ってみると、子供は已に死亡し、彼女は梅毒におかされていて、嫌悪におそわれるが、治療にあたり、やがて彼女は健康を回復する。しかし彼の好意など物ともせず、彼女は再びけばけばしい化粧をして夜の街へ歩き出し、永遠に Philip の前から消え去ってゆく。叔父の死亡により 500ポンドの遺産を得、医学生生活に復帰する。故郷の Kent 州でホップ摘みの休暇を過している Athelny 一家に招かれて訪問し、牧歌的環境で、健康そのものの Sally という娘を見、自然に結ばれてゆく。いくたの女性遍歴のあとに、彼の選んだ女はこの清純そのものの Sally であり、きわめて平凡な家庭の安息ということであった。彼の結婚申込を承諾したあと「私お午が食べたいわ。」と Sally に言わせて、この長編は終る。

「人間の絆」とはこの世に生をうけた人間が死に至るまで負わされ続ける運命もしくは業であり、性欲、所有欲、幸福への憧憬、貧困、そして性格、肉体制度の歪みである。主人公 Philip Carey は幼少の時代に両親を失う孤独の人間として描かれ、生れつきの蝦足という宿命を背負い、叔父夫妻との生活の中で、対決する宗教への煩悶を経験し、一方幸福への願望、野心の幻想などの諸々の呪縛に取りつかれるが、Philip は真実に直面することによって、一つずつその絆を払いのけて進んで行く。Of Human Bondage は、realism の手法を用いながら、究極において善の理想主義に至る道程をたどる自伝小説で、運命解脱に到達する人間研究の書であると言ってまちがいない。

Of Human Bondage という Maugham の長編を通観すると、ロンドンの医学生時代に関係を持つ Mildred Rogers との情念の絆は一つの大きな柱

であることは疑う余地がないが、Philip の人生開眼の見地からすると、パリ時代に出会って、ロンドン時代までつながりを持つ詩人の Cronshaw なる人物はもう一つの柱であると考えられる。この人物から、Philip は今までに接したことのない新しい世界を教えられ、色々な感化をうけて行く。この男は酔うほどに「芸術は、食物と女が与えられた時、退屈な生活から逃れるため、頭のいいやつが発明した逃げ場所にすぎんのさ」などとエピグラマティックな言葉をはき、芸術、人生、文学を論じ、Philip をひけつけずにおかない。この物語の中の Philip の人生遍歴を考える時、この人物の設定は必須なものとわかってくる。彼と知り合って間もない頃、Philip は「君は信仰を捨てただろう。けれども、その信仰に基づく倫理はずっと持ちつづけている。事実上君はクリスチャンだ」と聞かされる。Philip に新しい人生の英知を与える人物として登場し、ある時は作者自身の考え方を代弁する人間として、その考えを Philip にぶっつけてゆく。次の引用にあらわれた思想は、Maugham 自身のいだいていた快樂への考え方と言える。

…… You will find as you grow older that the first thing needful to make the world a tolerable place to live in is to recognize the inevitable selfishness of humanity. You demand unselfishness from others, which is a preposterous claim that they should sacrifice their desires. Why should they? When you are reconciled to the fact that each is for himself in the world you will ask less from your fellows. They will not disappoint you, and you will look upon them more charitably.

Men seek but one thing in life—their pleasure. ⁽¹⁾ (イタリック筆者)

また自分の詩というものについて「僕自身、別に僕の詩を買い被っているわけじゃないからね。人生ってものはね、生きるためにあるんだよ。なにもそれについて書くためにあるんじゃない。僕の目的は、人生が与えてくれる色々な経験を探し求め、生の一瞬一瞬から、それが与えてくれる情緒をもぎとることなんだ。創作などというものは、要するに、この生からよろこびを吸いとってしまふかわりに、むしろ生に快樂を加えるための美しいはたらきにすぎないの

(1) *Of Human Bondage*, Heinemann, 1966., Chap. 45, pp. 317-318.

だ。後世に残るかって？後世なんて糞食えさ」と自虐的な言葉をはき、Philipに、この人生の芸術家も、創り出しているものは、ヘボ画家のそれと同じものだと思わせたりしている。後述する106章の伏線となっている二つの個所をあげなければならない。一つは、人生において善と悪い悪というが、自分は賞めも、咎めもしない。大切なのはありのまま受け容れることだ。それは自分自身が万物の尺度だと言っている点である。

“…… But when I speak of good and bad…” Philip saw he was taking up the thread of his discourse, “I speak conventionally. I attach no meaning to those words. I refuse to make a hierarchy of human actions and ascribe worthiness to some and ill-repute to others. The terms vice and virtue have no signification for me. I do not confer praise or blame: I accept. I am the measure of all things, I am the center of the world.”⁽²⁾

もう一つの点は、Philipの人生の意義についての質問に対して、自分自身で発見するのではなくては意味がないと告げ、Cluny博物館行きをすすめて、そこにはペルシャ絨毯のすばらしい蒐集があって、それを見ていれば、人生の意義について答えが見つかるであろうと謎めいた言葉をはく所である。この言葉はこれからのPhilipの脳裡にこびりついて離れない。Fanny Priceの悲惨な死を見、才能のない芸術家の無意味さから画家を断念するという運びになることを考えると、Cronshawの口をついて出た言葉が、Philipの人生に重要な役割を果たしていることになるのである。Philipは、Cronshawに自分は画家としては物にならんような気がするが、二流の画家なんぞなってもしょうがないし、いっそやめてしまおうかと思っているとうちあけると、Cronshawは今の生活からぬけ出れるのなら、そうした方がいいと助言している。

芸術を志していたPhilipであったが、新しい生活への再出発のためロンドンに出て、St. Luke's Hospitalの医学校に入学する。パリ時代の画学生の友人Lawsonがパリを引揚げてロンドンに移ってきていることを知り早速会って、パリの仲間の動静を聞いてみると、実はCronshawからPhilip宛にあずかっ

(2) Ibid., p. 316.

ているペルシャ絨毯の切れ端のことを知らされる。Mildred との恋につかれ、しばし関係を持った3番目の女性 Norah Nesbit からは別な男との結婚を知らされ、失意のどん底にあった時、Lawson からの手紙で、Cronshaw がロンドンに帰っていることがわかり、訪ねてみると、痩せ細った Cronshaw は肝硬変におかされながらも、アブサンに酔いしれ、落魄の様相を呈している。見かねた Philip は、自分の下宿に引取って同居生活が始まる。Philip が「あなたが下さったペルシャ絨毯のことを憶えていますか？」と聞くと「そうだ君が人生の意味とは何だと訊ねた時だったな。その絨毯が疑問に答えてくれるだろうと言ったはずだが、答えは見つかったかね？」と問いかえされるが、Philip には「ノー」としか言えない。再び Cronshaw は「君自身で発見するんでなきゃ意味はないね」とつきはなしている。

Cronshaw の詩集が Upjohn という批評家の肝入りで出版される運びになっていたが、その日の訪れを待たず、Cronshaw の死が到来する。Philip は、色々の人生の知恵を与えてくれたこの詩人の一生は何と虚しいものであったかを痛いほど知らされる。Cronshaw の死があり、自称詩人 Hayward の戦病死を知り、Philip には憂愁の日が続く。Cronshaw は年長の友であったが、同年輩の Hayward の死は Philip に衝撃を与えずにはおかない。今までの彼は、本に逃避することができたが、その気にもなれず、British Museum に足を運ぶのである。今の彼には孤独のみが救いであった。いつもなら、この博物館のパルテノンの群像の前で、一人坐っていると心の鎮まるのを覚えたのであるが、今日は何一つ彼に語りかけてくれない。そこに集まっているガイド・ブックを手にした観覧客の下劣さはおぞましいものとしか写らない。

And it came to him that the gaping sightseers and fat strangers with their guide-books, and all those mean, common people who thronged the shop, with their trivial desires and vulgar cares, were mortal and must die. They too loved and must part from those they loved, the son from his mother, the wife from her husband: and perhaps it was more tragic because their lives were ugly and sordid, and they knew nothing that gave beauty to the world…… (3)

(3) Ibid., p. 806.

「一体、人生とは何のためにあるのだ」と Philip は絶望的な気持で自問している。青春の美しい希望に酬いられるものは苦しい幻滅それだけである。全く空しい夢のような気がしてくる。Cronshaw にしてもそうだった。彼が生きただということなど全く無意味であった。彼の一生の如きは、あの厚かましいジャーナリストに一片の書評を書かせるだけにあっただのではないか。Philip は自分の来し方をふり返ってみた。人生へ乗り出した頃の希望、彼の肉体が強いさまざまな制限、友人のない寂莫、愛情の枯渇、彼にしてみれば、常に最上と思われることをしてきたつもりであるが、このみじめな敗北ぶり。一彼は自省の刃に身をさいなまれる気持に満される。

Philip は Cronshaw の在りし日の姿を思い泛べているうちに、彼のくれたペルシャ絨毯のことを思い出す。そして青天の霹靂の如くにその解答に思い当る。解答を与えられてみると実にたわいもない謎遊びみたいなものであった。答はあまりにも明白であった。「人生に意味などあるものか」ということであった。空間を驀進している太陽の衛星である地球上に、それも遊星の歴史の一部分である一定条件の結果として、たまたま生物なるものが生れ出た。そうした生命は、いつまた別の条件のもとで、終りをとげるかわからない。人間も他の生物と同様、単に環境に対する一つの物理的反応として生じたものに過ぎないと思うに至る。

そして Maugham がアナトール・フランスの『文学生活』から取ったと言っている東方の王様の物語の登場となる。人間の歴史を知ろうと願った王様が、ある賢者から 500 巻の書を貰ったが、国政繁忙で読むいとまがない。賢者に要約してくるよう命ずる。20年後に 50 巻にまとめられたが、王はすでに老齢でそんな浩瀚なものを読む時間がない。再びそれを要約を命じ、賢者は 1 巻にまとめて持参する。しかし王は、死の床にあり、その 1 巻すら読むことができなかった。賢者は人間の歴史をわずか 1 行にして申しあげた。「人は生れ、苦しみ、死んだ」ということであった。Philip は人生の無意味を悟るのである。

(4) *The Summing Up*, Heinemann, 1964, p. 248.

Philip remembered the story of the Eastern King who desiring to know the history of man, was brought by a sage five hundred volumes; busy with affairs of state, he bade him go and condense it; in twenty years the sage returned and his history now was in no more than fifty volumes, but the King, too old then to read so many ponderous tomes, bade him go and shorten it once more; twenty years passed again and the sage, old and grey, brought a single book in which was the knowledge the King had sought; but the King lay on his death-bed, and he had no time to read even that; and then the sage gave him the story of man in a single line; it was this: *he was born, he suffered, and he died*…… (5) (イタリック筆者)

Philipの幻想の中に、もろもろの想念がころがるようにやってきた。彼は喜びにひたりきって長いためいきをついた。跳び上って歌でも歌いたい気持になった。この数ヶ月の間にこんな気持になったことはなかった。そして Cronshawの暗示した絨毯の謎を、彼の予言した通り自分の力で解明した喜びでいっぱいになる。

…… Thoughts came tumbling over one another in Philip's eager fancy, and he took long breaths of joyous satisfaction. He felt inclined to leap and sing. He had not been so happy for months. (6)

Philipの過去の人生は、幸福を尺度に計っていたから怖いものに見えたが、今や彼は、人生を別の尺度で計ることに気づいたのである。そして幸福感とか苦痛感すら、人生の意匠を複雑、軽妙にするために入ってくるものであり、どんなことが起ろうとそれは模様の複雑さを加える動機の一つに加えられるということにすぎないという境地に達する。

His life had seemed horrible when it was measured by its happiness, but now he seemed to gather strength as he realized that it might be measured by something else. Happiness mattered as little as pain…… whatever happened to him now would be more motive to add to the complexity of the pattern, and when the end approached he would rejoice in its completion…… (7)

(5) *Of Human Bondage*, pp. 808-809.

(6) *Ibid.*, p. 809.

(7) *Ibid.*, pp. 810-811.

Philip が幼年時代から負わねばならなかった身体的障害、両親の愛情の喪失、女性に対する不毛の恋情、宗教への不信という絆から解放され、人生無意味の人生観を獲得する姿をみてきたわけであるが、Philip の場合、それなるが故に、虚無の生活に没入してゆくのではなく、むしろ人生肯定の立場に立って、人生への再出発となるというロマンティズムの世界が展開される結末になっている。そしてこの人生観は作家の Maugham のまさに catharsis であったと言える。Maugham 41才の作である *Of Human Bondage* と64才の時の回想録 *The Summing Up* との間には20年以上の時間的距りがあるにもかかわらずこの人生模様の思想が語られていることをみても、Maugham 自身の考え方が多少の修正はあったにしろ、*Of Human Bondage* の延長線上にあることは容易に実証される。自分は、書くことが本質的要素であるが、人間本来のあらゆる他の活動もふくみ、最後に死が仕上げするような人生模様を書きたいと書き残している。

I wanted to make a *pattern of my life*, in which writing would be an essential element, but which would include all the other activities proper to man, and which death would in the end round off in complete fulfilment...⁽⁸⁾

(イタリック筆者)

Maugham は執拗に彼なりの模様を織り続けてきた。それは彼の与えられた環境と天与の力のもとで、望みうる最高のものだと言わしげに語っている。

I have followed the *pattern* I made with persistence. I do not claim it was a perfect one. I think it was the best that I could hope for in the circumstances and with the very limited that were granted to me by nature.⁽⁹⁾

(イタリック筆者)

Maugham の研究者として評価の定着している R. A. Cordell のこの自伝小説に関する評言を参照してみよう。この長い小説は、Philip⁽¹⁰⁾ が Mildred から

(8) *The Summing Up*, Chap. 15, p. 46.

(9) *Ibid.*, p. 47.

(10) Richard A. Cordell: *Somerset Maugham, A Writer for All Seasons*, Indiana University Press, 1969, pp. 96-97.

解放されるところで終りにした方が立派であるとしばしば指摘されてきたが、それはこの恋愛物語が、小説の主要なテーマをなしている、多くの読者が感じているからである。ところが、彼を知的、情的束縛から放してくれて、人生に対して寛容と勇氣とユーモアをもって直面させる哲学を、Philip が探究することを主要テーマとしているので、この小説の最高潮の場面であり、近代小説中のもっとも感動的な場面の一つは、Philip が、人生の意義についての苦悩に答えを見出す British Museum の中の挿話である。彼の知性をふるい立たせ、旧来の確立した信念の束縛から、また Mildred に対すを墮落的な情念の束縛から新しく解放されて、彼は歓喜すると結んでいる。Cordell も、Mildred との関係と Cronshaw とつながる人生模様の人生観を二つの柱としてみるとよからう。

作家 Maugham は、自分の哲学を築きあげるため、その探究を続けたのであるが、20代の半ば少し前「人生には目的がない」という結論に達している。小説の Philip はこれに欣喜雀躍するのであるが、Maugham自身は、慰めを得ることができず、St. Thomas 病院の医学校4年目になっても疑問を發している。しかしその悩みの霧散する時機が到来するのである。Philip が British Museum で人生無意味を悟るのは、恐らく長い間の Maugham の人生探索が、ここでは圧縮された形で表現されていると考えるべきであろう。恐らくその探索の底流には、Platon, Spinoza,⁽¹¹⁾ Schopenhauer の哲学や、St. Thomas 病院時代の科学者としての唯物的な物の見方を通して、必然論や宿命論の人生観が確立したと考えるのが妥当であろう。

The Summing Up の終りの数章にあらわれている Maugham の人生観は、真、善、美についてのものである。真は人生に意義を与える最高の価値とは言われない。真が何であるかは、いかなる哲学者もまだ決定的な答を出していないし、しかも人間は、自己の虚栄心、悦楽、利益のため真を犠牲にしてきている。人間は真によって生きているのではなく、仮託によって生きているのであ

(11) Ibid., pp. 73-74.

って、その理想主義は自惚れを満足させるためにつくり出した架空物語に真実という極印をおすための努力にすぎないと考えている。人生に意義と目的を与えるものは美であると Maugham は信じてきた。しかし美にも、美の判断にも絶対的、恒久的といえるものはない。もし美が人生の最高の価値の一つであるならば、美的感覚が、一つの階級のみにかぎる特権であるのは信じ難い。特殊な訓練を経た人々にのみ意味を持つ芸術の作品は、それに共鳴する階級とともに、価値のないものと考えられる。芸術というのはあらゆる人が享受するものである時、はじめて偉大で意味を持ってくる。ある彫刻が、古代ギリシャ人によって創られていようと、現代フランス人によって創られていようと、それは問題ではなくて、今現に、私たちに美的感動を与え、この美的感動が刺戟となって、私たちが仕事に駆りたてるということだけが重要である。Maugham は善を考える前に愛という問題を考える。愛には二つの意味がある。一つは純粹で単純な性的愛と愛情ある心優しさである。性的本能の昇華した愛情ある優しさは、善の過半を占めていて、善の消極的な要素である克己、自制、忍耐、修業、寛容といった小さな美德を実行することを容易にし、善のうちの厳しい性質のものを柔げる。そして善は、この現象の世界では、それ自身目的でみることを要求する唯一の価値である。以上が、Maugham の考えている真、善、美の関係である。

…… Goodness is the only value that seems in this world of appearances to have any claim to be an end in itself. Virtue is its own reward. I am ashamed to have reached so commonplace a conclusion. With my instinct for effect I should have liked to end my book with some startling and paradoxical announcement or with a cynicism that my readers would have recognized with a chuckle as characteristic. It seems I have little more to say than can be read in any copybook or heard from any pulpit. I have gone a long way round to discover what everyone knew already. ⁽¹²⁾

Of Human Bondage において、以上の図式をたどってみると、まず Philip が偏見や、固定観念を脱脚して、その真実を眺めるようになったという苦闘の

(12) *The Summing Up*, p. 303.

歴史が記述されている。人生の真実は真実として認めて、その上に美の世界を設定している。即ち、芸術もしくは実生活の中で、完全なパターンを創造して行くことが、窮極の目的と考えられる。ペルシャ絨毯の暗示するものは、この美的完成をめざす探究の記録ということになってくるのではないか。同時に善への希求があり、没我が真理認識の手段であるとともに、それ自体美であり、それは善と融合できるものという立場を取っている。

Robin Lorin Calder もその著書において、真、善、美の立場からこの作品を分析している。この作品の前半では真と美が扱われ、後半では善が語られているという見地を取っている。Mildred との情事にしても、Philip が emotion の独立に至る道程での重要な段階で、emotion が理性を圧倒する力をあらわすものであると分析している。主人公が、自己発見のためにうけなければならぬ洗礼で、かくしてはじめて自由をかちとるというのである。

The themes of truth and beauty, introduced in the first half, continue to their solution near the end, but the real interest of the author is with goodness What it (=relationship between Philip and Mildred) does represent, however, is a very important and dramatic step in the development of Philip's emotional independence ... The agonizing entanglement with Mildred is thus merely another trial which hero must undergo before he can achieve true liberty. ⁽¹³⁾

わが国における Maugham 研究者の一人相良次郎氏も、近著⁽¹⁴⁾において、この作品を真、善、美の弁証法的展としてみている。テーゼは「真実は偏見のない、ひややかな目で直視すべきもの。そうすれば、それは醜悪悲惨残酷であり、味気なく、空しく、侘しく、悲しい。」アンティテーゼは「同じ真実を芸術的な心で観照してみよう。そうすれば、それは一転して美となる。芸術は全て、真実という醜悪且強固な土台の上に、具体的な素材によって構築された壮麗な殿堂である。」ジンテーゼは「真実とは同時に無私誠実を意味する。真実とは

(13) Robert Lorin Calder: *W. Somerset Maugham*, Heinemann: London, 1972, p. 107.

(14) 相良次郎著「モームの世界」評論社、1977.

美德であり、善である。真実とは自然であることだ。自然礼讃者にとっては、自然は真・美であると共に善である。」真、善、美は Maugham が生涯を通じて追究したものであり、その思想遍歴において、弁証法的に発展をとげたものである。Maugham の作品の多くに、形と質と相互関係を変えながら核心となり、テーマとなってあらわれてくる。

以上が相良氏の論述であるが、ここではその紹介にとどめておく。

約30年ほど前にこの書に接した時、さしてすぐれた作品との印象をうけなかったのであるが、研究と教授の必要から幾度か回を重ねて読みかえすうちに、ここには Maugham の全てが内蔵されていることがわかり、かつ Hemingway のそれにも比すべき簡潔明晰な文体のとりことなり、人文研究誌上5回にわたり、試論の形でまとめてみた次第である。今後、内外の Maugham 研究家の新しい論考に接しつつ、違った角度から読みなおしたいものと考えている。

Reference Books

References to Maugham's works are to the Heinemann (London) editions.

Of Human Bondage. Heinemann, London, 1966.

The Summing Up, Heinemann, London, 1966.

Robert Lorin Calder: *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom*, Heinemann, London, 1972.

Richard A. Cordell: *Somerset Maugham, A Writer for All Seasons*, Indiana Univ. Press, 1969.

相良次郎著「モームの世界」評論社, 1977.